



## ぼくとわたしの夏休み **子ども囲碁教室**



8月10日（火）午前9時30分からと午後1時からの2回、中央公民館第5学習室で「ぼくとわたしの夏休み 子ども囲碁教室」が開かれました。この催しは、狭山市中央公民館主催のもので、さやま市民大学同窓会囲碁クラブ会員4名が協力して開催されました。参加者は小学生9人、保護者2人を入れた15人でした。

囲碁は難しくて奥の深いゲームですが、ルールはとてもシンプルなので、だれでもすぐに覚えることができます。参加した小学生は、全員囲碁は初めてでした。正式な碁盤は19路盤ですが、今回はより初心者用に9路盤で行いました。最初に基本ルール、「①碁石は黒白交互に打つ、②どこに打ってもよい、③打てないところもある、④陣地を多く取った方が勝ち」の4つだけを説明しました。

最初は囲碁クラブ会員と打っていましたが、皆10分ぐらいでルールをマスターし、その後友達同士で対戦していました。囲碁クラブ員はアドバイス等の助言のみです。短い時間でしたが、囲碁のおもしろさを充分楽しんだようでした。めざせ井山名人！



## 元気に活動中！

## 囲碁クラブ

—私達自身が楽しむこともりっぱな社会貢献です！（令和3年度中嶋会長の所信より）—

その言葉を実践している囲碁クラブ。上記記事のように会員自身が楽しみながら、活動を続けています。クラブの最新ニュースは会員の再入会です。しかも、囲碁クラブ唯一の女性会員!! 日曜日のEテレ「囲碁フォーカス」を見て、また楽しもうと思ったようです。クラブの雰囲気も、さらに和やかなものになりました。現在囲碁クラブは、第1、第3、（第5）火曜日の午後1時から5時まで、中央公民館で活動しています。まったく碁を打ったことのない初心者も大歓迎。初歩のルールからお教えします。囲碁に興味のある方は是非ご連絡ください。（連絡先：宮下 啓 04-2957-1998）

### 【 囲碁豆知識 】

◎狭山市に囲碁の彫刻があることをごぞんじですか？……入間川の八幡神社本殿「琴棋書画の図」には、「琴—音楽を奏でる」「棋—囲碁を打つ」「書—書を読む、文を書く」「画—絵画を描く、観賞する」が彫られています。中国では一般的に必要なとされる教養で、囲碁の彫刻は本殿の右側面にあります。囲碁の上達を願って参拝すれば碁力があがるかもしれません……！？



◎囲碁はメジャーなゲーム……世界の囲碁人口は4,200万人で80か国以上に普及しています。また、戦国武将も囲碁が大好きだったようで、ドラマでは武将同士の囲碁の対局のシーンをよく見かけます。囲碁が陣地取りゲームだからでしょうか？こんど戦国ドラマを見る時は、是非そんなところにも注目を！！

◎身近にある囲碁の言葉……これらは囲碁用語です。ご存知でしたか？「駄目を押す」⇒確認する。「一目置く」⇒相手に敬意を表し尊敬する。「布石を敷く」⇒物事を成功させるために手を打っておく。（Mさん）

## ● 妻とレモン ●

我が家にはレモンのハチミツ漬けが常備してある。すっぱさを感じる柑橘類が大嫌いな私の健康維持のためにと、せっせと作ってくれる。コロナ禍による自粛生活の期間、ふと思ったのであろうか、いつもは捨ててしまうレモンの種を、「まいたらどうなるのかしら、芽が出てくるのかしら」と妻は半信半疑、ダメ元で挑戦し始めた。10粒の種を2つに分け、一方は種の皮をむいて水につけ、もう一方は皮をむかずにそのまま水につけている。「どうなるのかしら」妻は毎朝水を変えながら様子を見守っている。数日後、皮をむいた方の種から、根らしいものが徐々に顔を出して来た。皮をむかなかった方の種には変化が見られなかったのであろう。妻が皮をむいて再び水に戻すと、後日同様に芽が出て来た。成長度にバラツキはあるものの、妻は容器に土を入れ10粒全ての種をまいている。すると次々と芽を出して来た。「あなた、発芽率100%よ」と満面の笑みで私に「見て下さい」と注文顔の妻。私は妻のリクエストに応え、容器を覗いて見た。暗い土の中から顔を覗かせた芽と、私の目があったような錯覚を覚えた。「葉の形や成長度にも個性があって面白いわ。子育てと似ているところが沢山あるの」と妻は言う。

日に日に成長していく様子を見ては、植物の生命力に癒されているかのような妻である。花を咲かせて実がなるのは、いつのことやらと思っていた時、「振り返って、『このレモンはコロナ禍の時まいた種なの』と笑える日が来るのが楽しみね」と、楽しそうに妻は言った。

(Tさん)



## ● 『散歩の醍醐味』 蝶の教え ●

梅雨の合間の晴れた日、クヌギ林の傍を散歩していると、ルリタテハと思われる蝶が軽快に目の前を通り過ぎた。よく見かけるモンシロ蝶やキ蝶のようにひらひらとゆっくり飛ぶのではなく、スピードがあり、風のない日は羽ばたく音が微かに聞こえてくる。日光に当たると、秋の紅葉と同じように、羽の瑠璃色がより美しく映える。挨拶するかのように2、3回、目の前を往復し、姿を消した。

昔懐かしい65年前の頃が走馬灯のように思い浮かんだ。仲の良い3人で、野山を駆け巡り、ルリタテハ蝶のように捕らえ難い、珍しい蝶を捕獲すると感動し、興奮して手が震えたのを思い出す。蝶以外の昆虫には目もいかず、なぜか蝶の美しさに惹かれた。夜の蝶に惹かれる素質がこの頃からあったのかも知れない。1年間生きられるのか定かではないが、厳しい冬を越冬する蝶もいるそうだ。故郷の匂いと空気感は望めないが、65年前に故郷で出会った蝶の子孫かもしれないと思うと、一層愛着が込み上げてくる。定まった木や草に卵を産むのは、卵が育ちやすいように考慮しているのであろう。卵から幼虫、幼虫から成虫になる過程では、親は一切無頓着であり、この世にいない場合も考えられる。自然の摂理は人が立ち入れない、奥深い神秘に満ち溢れている。

一方人は、おしなべて子が成人し、独立した後も、微に入り細に入り干渉したがる。親は子育て期間中苦労する事もあるが、背中を押され楽しさを享受することで十分ではないか。それ以上、何を望むのか。

極論すれば、独立した子供にとっては必要のない存在なのかもしれない。人は蝶のように、何故スムーズに子離れできないのであろうか。個体の一生のサイクルが、1年未満と平均80年以上との差であらうか。離れて暮らす4人の孫が、瞬く間に大きくなった。コロナ禍も影響して、遊んで貰うことが少なくなって来た。けれども、厳しい自然界での、蝶の生き方に比べれば、何と恵まれていることか。

(Mさん)

